シモマッチの校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男　盛岡中央高校附属中学校副校長

第32回

「いきがい」とは

□ 理容師さんとの会話から

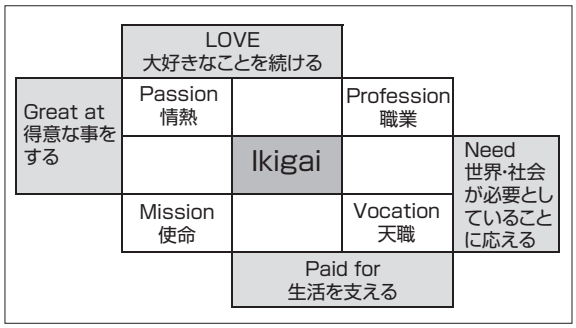
ある理髪店で、理容師のTさんと対話していたときのエピソードです。その理髪店は私が高校時代からずっとお世話になっていたところで、Tさんはそのお店に40年以上勤続されているベテランです。60歳を過ぎても、とても元気な方なので、私は「何か特別な健康法や運動などされているんですか」とたずねました。するとTさんは、理容師の仕事そのものが、体を鍛えることに連動しているので、特別何かする必要がないと話されました。確かに、一日中立っているので、それだけでも大変だと思ったのですが、Tさんによると、髪を切るのは、集中力と細かい手先の運動、頭を洗ったり肩や腕をマッサージするのは、足腰、腕などの筋力の鍛錬、また、耳掃除や、シェービングは中腰になったり屈んだりを繰り返す運動とのことでした。そんな会話の中で、私が強く印象に残ったのが、彼女の履いているナースシューズの話でした。「様々な靴を試す中で、たどり着いた理想の靴がナースシューズ。だけど、履いているうちに少しずつすり減ってくるので、それによって体重のかかりが悪くなり、微妙に仕事に影響する。だから年に何回も買い替える」。なんというプロフェッショナルな言葉でしょう。この話を聞いただけで、理容師の世界の奥深さを垣間見た思いがしました。Tさんは若い頃は、店長を任されるなど、マネジメントに携わっていたけれど、今は大好きな「理容」の仕事一筋にさせてもらっているので幸せだとおっしゃっていました。若い頃から彼女には「確かな技術」とバイタリティーがありました。そして年月を経て、現在はそれに加えて「心遣いと温もり」を持った理容師として、その背中で、若いメンバーに働くことの素晴らしさを語っています。

私は、Tさんと対話しながら、「働くこと」そして「生き甲斐」って何かということをずうっと考えていました。働くとは、もちろんお金を稼いで生活を維持することでしょう。でもそれだけではありません。働くことは、人を気持ちよくさせる、人の

役に立つ、つまり「社会へ貢献する」という一面もあります。そして、「さらに自分を磨き続ける」→「自分の人生が楽しくなる」という循環が生み出されていきます。まさに、働くことが、身体を鍛え健康を維持し人生を楽しく生きることとイコールになっているんですね。

「ikigai」

さて、ここで、以前から欧米で語られている「ikigai」という言葉をとりあげてみたいと思います。日本語の「生き甲斐」が海外に渡り「ikigai」として新たな価値が付加され世界に広がっているということですね。ちなみに欧米での「ikigai」は、the reason for which you get up in the morningと定義されているようです。「朝起きる理由」、つまり、これがあるから今日も朝元気に起きることができるということでしょうか。また、ikigaiは、Great at（得意なことを磨く）Paid for（生活を支える）Love（大好きなことする）Need（社会に貢献する）という四つの要素の重なりのなかにあるとされています。私はこれを図のようなベイチ図で示しています。



私は高校生に向けたキャリア講演会で「人はなぜ働くのか」という発問をします。すると、単にお金を稼ぐだけではなく、例えば「得意な事をして人の役に立つ」「楽しいことをしながらより良い世界を次世代に残す」「社会貢献と自己の成長を楽しむ」などといった言葉がでてきます。これはまさにikigaiへのアプローチのように思います。同時に、学ぶ理由についても同様に問いかけると、「大学に合格するため」とか「勉強しないと怒られるから」という答えがある一方で、「教科の内容が面白いから」「自分の強みと適性を知るため」「世界の課題を解決したいから」などという答えも出てきます。中には「人生を楽しむ力と、世界を広げる力を身につけ、自分のその先を大きくしていくため」という格調高い発言や「なぜ学ぶかを知るために我々は学ぶのだ」という哲学的でユニークな声もありました。

こうして眺めてみると、「学ぶこと」とは「いきがい」を見つけることでもあるとまとめることができそうです。つまり「いかに学ぶか」は「いかに働くか」につながり、それは「いかに生きるか」ということでもあるということなのでしょう。

さて、Tさんの話にもどります。散髪が終わると、Tさんは私に、「下町先生も、周りに惑わされないで、先生として、子どもたちに教えること一筋に働いて欲しい」と言われました。私は背筋が伸びる思いをしました。Tさんは、これからも管理職として生きていく私に対して、エールを送りつつも、忘れてはならない根っ子を示してくださったように思ったのでした。